

# 全書研究会報



『神奈川大会とコロナ禍』  
全書研会長 加藤 祐司

全国的に新型コロナウイルス感染の収束が見られず、依然として忍耐を強いられる日々が続いています。

このため、今年の二月に開催予定されていた全書研神奈川大会は、順延を余儀なくされました。

さて、全書研は言うに及ばず、幼・小・中・高校・大学の全国組織で、今日そして明日からの書道教育を見据えて、日々活動を続けています。

今後の活動として、本会報142号で、来年二月に開催予定の「全書研神奈川大会」の骨子をご案内いたします。

さらには、事務局統括部が中心となつて、全国の各地区代表の方に「研究組織、研究方法、発表会の有無など」について、アンケート調査をお願いして、その調査結果を全書研全国大会の「研究紀要」に掲載し、会員の皆様にお伝えできるように作業が進行して

ります。こうした中、昨年度から小学校では、新学習指導要領のもとに新しい教科書で、今年度からは中学校で授業が行われています。  
(高校の「書道I」は来年度から)  
また、文部科学省は、昨年度十一月から十二月にかけて、全国の大学国公立等361校550学科等を対象に、「小学校および中学校(国語)教諭免許状の教職課程における書写の取組状況に関する調査」を行い、その結果を今年の二月に公表しました。その中で、「新学習指導要領を踏まえ、本調査結果を参考にしつつ、書写に関する実技の充実を図るなど、より実践的な教育内容の充実に努める」と述べています。教員養成大学に「書写」への取組みについて、一層の充実を促している点を、今後注視していきたいと思えます。  
来年二月の、全書研神奈川大会

では会員相互が日々研鑽を重ね、充実した大会になりますようお願いつてやみません。

## 四国書写教育研究会の現状と課題 〜書写教育への思い〜

四国書写教育研究会 会長  
高知県書写教育研究会 会長  
高知市立東東中学校 校長  
大谷 俊彦



新型コロナウイルスの感染拡大の収束が見えてこない。「主体的・対話的で深い学び」をキーワードにした新学習指導要領が展開されているなか、学校現場では、感染防止の観点から、「対話的な学び」をどの程度まで実施できるのか手探り状態の日々が続いている。

そうしたなか、公開授業を含む各教科の研究発表会も開催が難しい状況にあり、書写教育でも同様の課題を抱えている。書写の四国大会については、高知、愛媛、香川、徳島の順で、隔年開催を原則としており、これまでの諸先輩方

発行所  
全日本書写書道教育研究会  
〒106-0047 東京都港区  
南麻布3〜9〜33  
港区立本村小学校内  
発行人 長野 秀章  
広報部長 佐藤 美緒  
印刷責任(株)文書館  
☎ 03(3918)5351(代)

の功績により、二十二回の歴史を刻んできている。本来ならば、昨年度、高知大会を兼ねて第二十三回の四国大会を行うことになっていたのだが、コロナ禍の影響で、現在は開催を延期している。状況が改善されれば、今年度本県で開催する方向で計画を進めている。

四国四県が抱える書写教育に関する共通の課題として、①書写部会の部員数の減少②中学校書写部会の衰退③書写部会の国語部会への統合問題④書写部会としての成果の発信不足⑤書写教育におけるICT機器の効果的な活用方法の開発、などが挙げられる。しかし、こうした課題は四国だけに限ったことではない。このような状況下だからこそ、四国四県が一丸となつて課題への対応策を考えていきたいと考えている。

予防接種の普及により感染拡大の沈静化を願うばかりだが、まだまだ予断を許す状況には至っていない。今後も感染拡大に伴い、再び長期の休業を強いられ当初計画していた授業時数を大きく下回るような事態も予想される。その際、①どの単元を扱って、どの単元を扱わないか考える。②単元の軽重を考え、標準的な配当時数をもう一度見直す。③ICT機器を効果的に活用し、指導時間の短縮を図る。などの視点で「書写学習としてははずせない部分はどこなのか」を真剣に問い直さなければならぬ。まさに教員の「カリキュラム・マネジメント力」が試されている。

また、昨今、教育関係者等から学校の書写教育が適正に実施されていないのではないかという指摘を受けることがあることから、各学校においては、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、次のことについて再確認をお願いしたいと考えている。①書写の配当授業時数を確実に実施しているか。②硬筆・毛筆を関連付けた書写の指導を行っているか。③小学校低学年では、点画の書き方、特に終筆の「はね、払い」への意識を高めるために、硬筆ではなく弾力のある筆記具(水書筆等)を効果的に用いているか。④中学校では、自分の名前や住所、家族の名前や学校名など、身近な文字を行書で書く指導を行っているか。

GIGAスクール構想の実現により、各学校に一人一台のタブレットが整備され、学校の授業は大きく変わろうとしている。書写の授業も然りである。書写の授業でタブレットをどう使っていけばよいか、デジタル教科書をどう活用していけばよいか、今までのコンテンツベースからコンピュータベースへの授業転換をどう図っていけばよいか、など課題は山積している。「書くこと」と「ICT機器の活用」の両立を目指した「ハイブリッド型の書写授業」の在り方を真剣に考えることが、今、迫られているのである。  
全書研の先生方には、今後とも四国書写教育研究会へのご支援・ご協力をお願いしたい。

### 東京都の活動

東京都小学校書写研究会

会長 土上 智子

(江戸川区立南小岩第二小学校長)

令和二年度は、新学習指導要領  
全面実施の年であり、小学校書写  
においても、運筆の能力を高める  
ことをねらいとして小学校低学年  
で水書用筆等という新たな用具が  
導入されることになった、大きな  
変革の年でした。振り返れば、臨  
時休業から始まり、感染症対策を  
しながらの教育活動を余儀なくさ  
れた一年間でした。例年、年度末  
に行っていた本研究会の研究発表  
会も、緊急事態宣言下で中止せざるを得ない結果となりました。しかし、研究授業の準備はできていたため、研究委員及び各地区には当日の指導案集を送付するとともに、例年通り各校宛に研究紀要のCDを配布することができました。

二年度の指導案では、書写学習における「主体的・対話的で深い学び」について、より分かりやすくするために、研究の視点として「学び合い」を明示することになりました。また、「深い学び」の具現化である「日常に生かす」ことをさらに意識し、カリキュラムデザインとして、指導計画に日常化の授業場面を具体的に設定することにしました。

また、本研究会では、より多く

の先生方に、書写指導の目的と指導法を知っていただくために、六年前から、東京都教職員研修センターとの連携研修を行っています。この研修会は大変好評で、毎年、募集人数一杯の申込みがあります。二年度は、感染症対策のため、夏の指導法・実技研修会、高学年の授業研究会共に東京都教職員研修センターが会場となりましたが、予定通り実施することができました。

本研究会では、このような状況であるから何もできないということではなく、このような状況下であっても、安全策を講じ、できる限りのことを行おうという考えで臨んできました。

#### 【令和二年度の研究について】

研究部長 佐藤 美緒

令和二年度は、七月の下旬に初めて、低・中・高の研究委員が顔を合わせて研究がスタートしました。コロナ禍で、研究の進め方も変え、低・中・高の部会を合同で二回実施しました。各部会の指導案検討の後で、研究の視点に対して各部会で考えた手立てや、部会で課題となっていることを他の部会も共有しました。同じ部会の中でも指導案検討のために集まることも難しかったため、メールでのやり取りやZOOMなどを使って話し合いを行ってきました。実証授業当日には、密を避けるため部

会のメンバーを中心として少人数での参観としました。連携研修の高学年部会は、事前に授業をビデオに撮り、その映像を観ながら説明するという方法も行いました。これらの工夫により、例年より遅いスタートでしたが、実証授業は例年通り、低・中・高で一つつ実施できました。コロナ対応のなかで研究を進めるための工夫は、効率よく時間を確保し、課題を共有する方法として、今後も使っていきたいと考えています。

令和二年度は、「書写の能力を高め、日常に生かす学習指導の工夫」を主題として、低学年、中学年、高学年に応じた目指す児童像を掲げて、大きく四つの研究の視点を、1 書写の能力を高める指導の工夫 2 自ら課題をもち主体的に解決する学習過程 3 日常の手書き文字に生かす工夫 4 学び合いを取り入れた学習活動として、各分科会で研究を進めてきました。

#### 【低学年分科会】

江東区立東雲小学校 前川裕希

低学年では、学習したことを学習場面や生活の中に生かしていくための力を育むための、筆記する際の姿勢や筆記具の持ち方、点画の書き方、文字の形、筆順など基礎的な事項を身に付けることが求められている。それを受けて、分科会では、書写の授業で身に付けた知識及び技能を生かそうとす

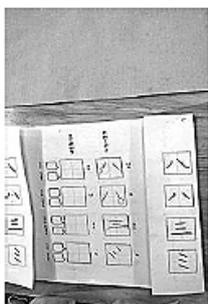
る態度を育成するために、授業内で教材文字以外の文字に広げ、他教科の学習や日常生活に生かす指導計画の工夫を検討してきた。また、新学習指導要領に対応した適切に運筆する能力の向上につながるよう、水書用筆等を使用すること、学び合いの仕方を工夫して学習方法を研究しながら、基礎・基本の習得に向け実践を行った。また、感染症予防対策として、人や人の物に直接触らないような授業を組み立てた。

研究授業では、「にているかん字とかたかな」の学習を行い、形の似ている片仮名の似ているところと違うところを分析した後、自己校正から個々の課題を明確にし、文字の練習をした。本時で扱う文字の実態調査を行うと、特に「ツ」と「シ」の払いの向きや点の向きができていないことが明らかになった。そこで、この二字について重点的に取り上げ、「ソ」「ン」については、学習したことを生かす場面で扱うこととした。

また、書字過程を見やすくするために水書を見合うようにし、距離を保ったままアドバイスタイムを行った。アドバイスをする際には、書写用語を使うことも指導をした。また、書写カードのレイアウトを工夫し、まとめ書きを書く際に、ためし書きを見えないようにして、まとめ書きのすぐ横で基準となる文字を見ながら書けるようにしたこと、基準を意識して書くよう

になった。日常化を図る場面でも、似た文字を書写カードに書き込めるようにしたことよかった。しかし、両面で使用することにより、使う場面で表にしたり裏にしたりすることが何回もあり、低学年の児童にとっては活動が煩雑であった。今後は、授業の流れに沿って、よりわかりやすくレイアウトできるようにさらに工夫していく。水書をアドバイスタイムにしたことで、書字活動を見合えることに加え、硬筆よりも見やすい大きさ、太さになり、わかりやすくなった。

低学年として、書写用語を活用したアドバイスタイムの動画を作成したが、実際に活用して授業する場面が少なかったため、次年度以降も検討を続けていく。



【中学年分科会】

国分寺市立第三小学校 藤原あゆこ

中学年分科会では、二年度から加わった研究の視点の一つの「学び合いを取り入れた学習活動」にも重点を置き、主体的で対話的な学び合いができるよう、授業内容や形態を工夫した。元年度の成果としては、試し書きの後、自分のめあてを設定して、そのめあてに合った練習用紙を選択させたことと、いずれの授業においてもデジタル教材を用いて筆使いを確認して児童の学習意欲を高める指導の工夫ができたことである。また、デジタル教材（運筆がわかる映像）を活用することで児童は正しい運筆方法を確認しながら練習することができた。

課題としては、発達段階に応じた練習用紙を適正な枚数にすること、書字過程を見合うときや相互評価をするときは、書写用語を取り入れた対話的な活動にすることなどが挙げられた。

これらの成果と課題を基にして、二年度は「自分の課題に合った練習用紙の作成」と「学び合いを取り入れた学習活動の中での書写用語の積極的な活用」を重点として、研究を行った。

研究授業では、「画（左払い）の方向を理解し、形を整えて書く。『麦』（第四学年）」を単元の目標とし、授業を行った。

まず、導入では、左払いの漢字を仲間分けして、左払いの特徴を

捉えさせ、本時のめあてへとつなげた。成果として、今回の授業では、めあてである「左払い」が集中的に練習できたことである。「麦」の下の部分だけの練習用紙を作成させたことで、自分の課題が明確になり、課題解決のための練習が十分にできた。

また、アドバースタイムでは、書字過程を見合い、書写用語を使って、助言やアドバースを行った。授業の前に書写用語を確認したり、アドバースタイムの前に書写用語を提示し、助言の仕方を例示したりして、スムーズに使えるよう指導の工夫をした。常に提示しておくことで、児童らは言葉を確認しながら、助言やアドバースをすることができた。

課題として、練習用紙の作成の工夫が挙げられた。「麦」の下の部分に特化して練習させたことで、練習用紙が単調なものになり、練習自体が、作業のようになってしまった。今後は、自分のめあてを達成させるには、どのような練習用紙を作成すればよいのか考えさせ、深い学びにつながる指導の工夫が必要である。

今回の研究を通して、授業展開の随所に深い学びを取り入れることにより、児童の文字の見方や文字への意識も高められることが分かった。その培った力が日常生活のどのような場面で生かしていきけるのかを今後も研究、検証していきたい。児童の実践力を付けていきたい。

【高学年分科会】

杉並区立四宮小学校 小林健一郎

目指す児童像を「書写で培った力を、日常生活の中で活用できる児童」とし、研究を行った。

タブレットパソコンの配備が急速に進み、児童を取り巻く文字文化は大きく変化している。それでもノート、ワークシート、テスト等、手書きをする頻度は依然高い。また、手紙、ポスターなど、相手意識をもって手書きをする機会も多くある。日常においても文字を正しく抵抗なく書いたり、書くことを楽しんでできる書写力を身に付けさせていきたい。

そこで、高学年分科会では学習指導要領国語編に示された書写の指導内容である「用紙全体との関係に注意して、文字の大きさと配列などを決めて書くこと」、「穂先の動きと点画のつながりを意識して書くこと」についての指導を検討した。書写の授業が主体的で対話的で深い学びとなるよう取り組んだ。

研究授業では、第六学年の「さみだれを あつめて早し 最上川」を正方形の用紙に書き、用紙に合った文字の大きさと配列について考える授業を行った。

分解した教材文字を電子黒板上で並べることで基準の理解を促したり、課題に合った練習用紙を例示し、必要な目安を選んで自作したりできるようにした。主体的に判断しながら、課題解決を図る姿

が見られた。学習したことを生かして自分で考えた俳句や短歌を書くことで日常化を図ることもできた。横浜国立大学教授青山浩之先生からは、「ICTを活用し、児童が楽しく課題をつかみ、一人一人がそれぞれの方法で学んでいた。課題解決型の学習で、学びの個性が図られ深い学びになっていた。水書用筆は、低学年と高学年で使用する用途が異なってくるが、使い続けることには意味がある。高学年での使用の用途についても更に研究していくと良い。」と御指導いただいた。

課題解決型の学習を続けることで、児童の主体性が益々向上し、基礎基本の習得につながる。それは、日常にも生かされる書写力になる。今後も誰もが自信をもって行える書写の授業を研究し、提案していきたい。

【成果】

- ①書写の能力を高める工夫としては、低学年での水書用筆と硬筆の効果的な使い方を、中学年高学年での毛筆と硬筆、高学年で一部水書の利用により、様々な筆記具に応じる学習において、児童の変容が見られている。
- ②自ら課題をもち主体的に解決する学習過程について、試し書きと基準を比べて、めあてを立てさせることは従来通り有効だった。導入の工夫により、楽しく取り組みながら本時のねらいにつな

げることができた。ICTを活用して基準や用具の使い方を理解させやすくした。右利き左利きどちらにも対応した書写カードの活用や自分の課題に合った練習用紙の例の提示も、自ら課題をもち、主体的に解決することにつながった。

③日常の手書き文字に生かす工夫として、本時の授業から他教科の授業で生かせる単元を明示した。低学年では、実証授業時間の中で本時に学習した字と似た文字を書写カードに書き込めるようにした。

④学び合いを取り入れた学習活動では、各自のめあてに向かって練習する場面で友達同士が見合う活動を行った。コロナ対策のため、低学年も水書用筆での練習の際に見合ったことで、他の学年の毛筆で書いた時と同様、席に座ったまま見合うことができた。

【課題】

自分の課題を明確につかみ、課題解決に向かうための学習過程の工夫をさらに進める。また、学び合いの質を向上するために、書写用語を使った相互評価ができるように、低学年からアドバースタイムの助言の仕方が分かるような映像資料を作成していく。目的意識をもって日常化させるための工夫について、授業でできることや他教科内容を明示することで、誰でも指導しやすくなることをめざす。

全書研事務局事務統括部からの  
お知らせとお願い  
全書研事務局事務統括部

一 各地区組織の調査について

新型コロナウイルス感染症の猛威は衰えず、ワクチンの普及が急がれるところです。

昨年三月の公立学校全国一斉臨時休業から全書研もほとんど活動をすることができず、令和二年度の全国大会（神奈川県）も令和三年度へ順延となっております。

早くこれまで通りの研究活動が再開できるようになることを願ってやみません。

さて、このような中、各地区では研究活動や組織の見直し、体制の強化等に取り組まれていることと思います。

そこで全書研では、各地区の研究組織、研究方法、発表会の有無などについて調査し、まとめ、各地区の今後の研究活動の充実に生かしていただくことを考えました。ご多用の折とは思いますが、各地区代表の方にアンケート用紙をお送りしますので、回答にご協力ください。

また、地区代表者が替わっている場合は、その旨を全書研総務部までお知らせください。

以下に、アンケート調査の内容を掲載します。

○研究会組織に関すること

質問1 研究会組織の有無について

質問2 研究会規約について

質問3 研究会組織図について

質問4 研究会役員一覧について

質問5 役員会（理事会等の幹事会も含む）について

質問6 研究会会員名簿について

質問7 会員名簿の管理について

○研究活動に関すること

質問8 研究発表会（通常の研究会ではありません）について

質問9 研究紀要（研究冊子等の研究成果物）の発行について

質問10 研究会の持ち方について

（授業研究会・実技研究会等を合わせてお答えください）

質問11 授業研究会の回数について

質問12 実技研究会について

質問13 実技研究会の回数について

○その他の活動に関すること

質問14 書写・書道に関するコンクールについて

質問15 書写・書道に関する展覧会について（コンクールに付随するものを含む）

以上の質問を選択方式でご回答いただきます。アンケートが届きましたら、ご協力のほどよろしくお願いたします。

なお、このアンケートの結果は、まとまり次第、全書研全国大会の研究紀要の中でお伝えする予定です。よろしくお願いたします。

二 水書用筆等を活用した指導法研修会（以下 水書研修会）について

全書研の加盟する「書写書道教育推進協議会」（以下 協議会）では令和元年度より水書研修会を開催してきました。平成三〇年度、令和元年度で全国十一会場約八〇〇人の書写書道教育に関わる方が研修を受けました。令和二年度、令和三年度は新型コロナウイルス感染症蔓延防止のため活動が休止状態ですが、落ち着けば水書

研修会を再開する予定です。研修会の持ち方には二通りあります。

一つは、主催者が会場と研修会参加者を確保し、協議会から講師を派遣してもらう方法です。講師は、協議会が責任をもって選任してくれます。

もう一つは、主催者が会場と参加者を確保し、講師も選任する方法です。

どちらの場合も、協議会事務局（全日本書道連盟事務局が兼任）に申し込むと研修用DVDと研修テキストが無償で配布されます。（配送費は負担いただく場合があります）

また、現在書道用品連盟様のご厚意で、水書用筆の見本と筆ならし、水書用紙を無償でご提供いただける場合があります。詳しくは協議会事務局にお問い合わせください。

なお、水書用筆等について様々なものが市販されていて、どれがいいかという質問が寄せられます。

水書用筆等は、水をつけて使うものとタンク式のものに大きく二種類に分けられます。

どちらも一長一短があります。タンク式は授業前に水を入れて行けば学習時間の中で準備に時間を割く必要はありませんが、長期保管をするときには水を抜いておかないと雑菌が繁殖したり、かびたりします。水につけて使うものは、時間中に水の用意をしなければなりません。すぐに乾くので保管には便利です。衛生面を考えると水をつけて使うの方がよいです。

各学校におかれましては、学校の実態に合わせて水書用筆等を選んでください。

全書研第六十一回全国大会（神奈川県）について  
全書研事務局事務統括部

令和二年度に予定されていた全書研第六十一回全国大会（神奈川県）は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で令和三年度に延期となっております。この度日程案A・Bが決まりましたので、お知らせいたします。

なお、十一月末には、新型コロナウイルス感染症の状況を見て、A案で行うかB案で行うかまたは中止にするかを決定いたします。ご承知おきいただけますようお願いいたします。

大会日程案

【A案】

●開催日 令和四年二月十八日（金）十九日（土）

●場所

横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校 鎌倉女子大学（大船キャンパス）

●主な内容

（一日目） 授業公開（五校時）、分科会

（二日目） 副理事長会・常任理事会、開会式・総会、研究発表報告（小・中・高・大・その他）、分科会報告、講演会、指導・講評、閉会式

【B案】

●開催日

令和四年二月十九日（土）

●場所

鎌倉女子大学（大船キャンパス）

●主な内容

副理事長会・常任理事会、開会式・総会、授業公開（VTRによる）、研究発表報告（小・中・高・大・その他）、分科会報告、講演会、指導・講評、閉会式

●なお、レセプションについては中止です。

大会開催については、十二月初旬に全書研ホームページ

(<http://zenshoken.org/zenkokutaiikai>)

に掲載しますのでご確認ください。

大会長 長野秀章（全書研理事長）  
大会運営委員長 青山浩之（横浜国立大学教授）  
大会事務局長 杉山勇人（鎌倉女子大学短期大学部准教授）  
大会事務局 土上智子（江戸川区立南小岩第二小学校長）  
電話・FAX 03（3658）4513